

## 研修報告書 No.15

研修先： 嶺北中央病院

今回、私は高知県嶺北地域に位置する嶺北中央病院において 4 週間の地域医療研修を行った。嶺北地域は高知市の北側、四国の真ん中に広がる山間部で、山林や河川に囲まれ、公共交通機関も乏しい地域である。人口は減少傾向にあり、特に高齢化が著しく進んでいる現状がある。高知県全体では病床数・医師数ともに全国平均を上回るが、県内でも都市部と郡部の格差が大きく、嶺北地域は医師数や医療資源が大きく不足している地域のひとつである。高知県では 2025 年問題を見据え、病床機能の再編や地域医療構想を策定し、効率的な医療提供体制の構築を進めているが、実際の現場では依然として課題が山積している。

嶺北中央病院は病床数 99 床を有し、内科、外科、皮膚科、整形外科を中心に地域の患者さんの外来、入院診療を行っている中核病院である。常勤医師として総合的な知識を持った内科専門医や外科専門医が勤務しているが、循環器内科、消化器内科、脳神経外科、泌尿器科、婦人科などの専門外来は週数回の非常勤医師の外来に限られている。特に整形外科や脳神経外科、循環器内科は高齢者に多く救急疾患も多いが、嶺北中央病院では非常勤診療が中心であり、緊急検査や治療、入院対応は難しいのが現状である。そのため、緊急対応が必要と判断された場合は、高知市内の高度救急医療を担う病院へ直接搬送する体制をとっている。このような医療アクセスの制限は、都市部で育ってきた私にとってカルチャーショックであった。医師不足や医療資源の偏在について知識として学んだことはあったが、実際に現場に立ち会い、患者搬送や地域住民の生活を目にしたことで、改めて問題の本質を考える良い機会となった。

研修では、外来診療や救急対応、病棟業務に加えて、訪問診療や往診の同行、デイケア施設の見学、リハビリテーションや褥瘡回診、NST 回診、多職種カンファレンスへの参加など、多岐にわたる経験ができた。特に病院内での診療だけにとどまらず、患者さんが「地域で生活続ける」ためにはどのような工夫や支援が必要かを、医療スタッフ全員が真剣に考えていたことが強く印象に残った。医師の役割も単に疾患を治療することだけでなく、住宅環境や福祉サービスの利用、さらには地理的条件や交通手段など、都市部ではあまり意識しない要素まで含めて診療計画を立てていた。このようなことから、地域医療の本質を学ぶことができたと感じている。

また、小児から高齢者、内科疾患から外科疾患、さらには精神疾患まで幅広い患者さんが受診することや、地域でどのように生活してもらうかの計画を立てたり、それをマネジメントする総合的な能力を持った医師が複数人必要だと強く感じた。特に、嶺北地域などの医療資源の限られている地域では専門領域に特化した医師より、地域の実情に合わせて包括的に診療を行える総合診療科に代表されるような幅広い知識を持った医師が必要であると考

えた。

さらに、多職種連携の重要性も学んだ。褥瘡回診やNSTカンファレンスでは、医師のみならず看護師、管理栄養士、リハビリスタッフが積極的に意見を出し合い、患者さんの退院後の生活や施設入所を見据えた具体的な計画が立てられていた。都市部では「病院中心」となりがちな診療場面も多いが、地域医療の現場ではむしろ病院は地域の一部であり「地域中心」で考える場面が多かった。

今回の研修を通じて、私は「地域で診る」ということの難しさを学んだ。都市部のように豊富な医療資源が当たり前にあるわけではなく、限られた環境の中で患者さんと家族に寄り添い、医療と生活の両面から支えていく姿勢が地域では求められていると感じた。特に、患者さんひとりひとりに合わせた医療や福祉のかたちがあり、その根底には生活や家族背景、経済状況といった個別の事情があるということを強く感じ、私が今後どのような病院に勤務したとしても、そのような視点を忘れないようにしたい。